

生保不正受給の解明を

今年2月に明らかになった生活保護による「介護タクシー」料金不正受給事件は、最近になって警察が当事者である生保受給者とタクシー運転手を「詐欺」容疑で逮捕、また厚生労働省が鈴鹿市に特別監査に入るなど、新たな展開を見せています。まだ議会にはきちんとした報告ありませんが、新聞報道では、これまでの説明とはちがう新たな問題が次々と出てきています。

「不適切な請求」ではなく「詐欺」事件である

3月議会では森川議員がこの問題をただしました。「1日に1人が5つの病院に行き、16時間5往復タクシーを使い、運賃と待機料で6万円」という、法外な請求をチェックできずに支払い続けていた原因は、との質問に、市は「職員の知識不足、請求書のチェック体制の甘さ」などという程度の答弁に終始しました。そして問題を「不適切な請求」と説明していました。

しかし今明らかになりつつある点は、「病院に行った、タクシーを使った」こと自体が虚偽である、ということです。市は「タクシーで病院に行った」ことは事実だという前提で、しかし待機料などは「不適切な請求」だから返還させたとしていました。この事実の認識が甘かった、というよりノーチェックではなかったのか、が大きな疑問です。

何より残念なのは、問題の解明が市として何も進まず、警察の捜査や厚生労働省の監査によって新たな事実が次々出てきていることです。鈴鹿市役所には自浄能力がないのか、と言われても仕方ない、恥ずかしい事態です。この際、事件の全体像とその原因、そして責任問題までのすべてを調べて、市民が納得できる報告、結論を出さねばなりません。

一方では、この事件への対応として、これまで正しく介護タクシーを利用していた人にまで、市外の病院や、市内でも遠い病院にはタクシー利用を一切認めない、などの指導がされ、困っている障害者の方が出ています。いったい福祉行政はだれの味方なのか、が問われています。

農家になる人を育てる豊田市の施策

10月10日、市議会の研修視察で豊田市に出かけました。豊田市といえば「自動車の町」というイメージですが、農業も盛んな所です。ここで豊田市とJAが共同で「農ライフ創生センター」を立ち上げ、新たに農業を始めた人に2年間の研修を行ない、修了者には1000㎡以上の農地をあっせんして、本当の「農家」になるまで支援する、というユニークな施策を行なっています。今年で5年目になり、すでに115人が修了、その先が新規就農63人、帰農30人、援農8人と、ひじょうに高い定着率（就農率88%）です。農協は営農指導員の講師、農産物の販売、市は農地あっせん、大型農機の貸し出しなどで支援しています。

毎年50人ほどの受講生の半数が60才台の定年組、50才台の早期退職組も合わせると8割ほどで、「第2の人生の生きがいを農業に」との意欲をもった人がチャレンジしています。

鈴鹿の町にも、退職後に田畑での仕事に打ち込んでいる人が多くいます。一方で、後継者の若い人がいないとの悩みも深刻です。この問題をうまく組み合わせて、豊田市のような支援制度を行なえば、ちょっと先が見えてくるような気がしました。国が進める「大規模農家」化とはちがう道です。

右翼団体の、目に余る妨害活動

「9条の会すずか」が行なった8月24日の学習会、10月12日の講演会、そして共産党が開催した8月31日の演説会に、右翼団体が3度も街宣車を連ねて妨害活動にやってきました。そのたびに会場周辺の神戸の町は、何時間もボリュームいっぱいの罵声連呼で、大変な迷惑をこうむりました。

主催者として私たちは、そのたびに警察に警備要請をおこない、警察も大勢の警備体制を組んでいただき、何度も打ち合わせなどに忙殺されました。

これまで県内での大きな演説会や集会に右翼団体が来ることはありましたが、鈴鹿での小規模な催しに押しかけて来たのは初めてのことです。平穩に活動を進めている市民団体にとっては、迷惑どころではありません。身の危険すら感じることもあるし、参加しようとしていた市民で、びっくりして帰ってしまった人もいます。

しかし、こんな妨害に負けてはいられません。憲法で保障された「表現の自由」を、みんなの力で守っていきましょう。

公立幼稚園統廃合案に疑問ぞくぞく

10月15日に開かれた第6回鈴鹿市公立幼稚園再編整備検討委員会を傍聴しました。前回に市教委事務局から提案された「再編整備案」についての検討が主な議題となりました。

現在の23園を将来12施設に統廃合するという市教委案に対して、市P連などの親側の意見は、現在の幼稚園のいちばんの特長である「小学校との併設による連携、学校へのスムーズな移行」がなくなってしまう、というものが多くありました。当日配られた各園PTAの意見の中から紹介します。

コスト削減の子どもへのしわ寄せは許せない

公立幼稚園は、地元の同級生、小学生、地域の方々との交流により、小学校生活にスムーズに入れるという最大の利点があります。統合案は、単に園児数のバランスや経費削減を考慮したものであり、親の気持ちを無視した案のように思います。

私たちの地区にも保育園があり、私立幼稚園の送迎バスが何台も走っています。どこに通うかを決めるのは、子ども本人ではなく親です。では市立幼稚園へ預ける理由は？ほとんどの方が、地域との繋がり、兄弟（小学生）との関わり、登園方法、もちろん保育料もあると思います。

「中学校区を単位とした」とあるが、愛宕小校区においては、現在児童は3つの中学校に進むことになり、まったく実態に合わないものである。

行政のコスト削減のために、これから大人になっていく大切な時期の子どもたちにしわ寄せが来るのは許せない。

この案が実現したら、2年保育になっても家から遠くなる人たちは、余計に来なくなると思う。

再編案には反対である。4歳児の抽選を廃止し、希望者全員を受け入れてほしい。1年保育の園でも希望を聞き、2年保育を検討して。

公立幼稚園は、保育料も家計にやさしく、子ども一人一人にそった、ゆったりした成長を育んでくれる。

検討委員会では、引き続き再編案の検討を時間をかけて行なう方向ですが、年度末の3月には結論を出す見通しです。鈴鹿市の幼児教育の基本が大きく変わろうとする、重要なときです。しっかり注目していかなばなりません。

ずいそう



花の香りを楽しめない

私が「アレルギー性鼻炎」、花粉症になってから、もう30年ほどになる。その始まりは、市職員の仕事で田んぼの現場に毎日出ていた秋のこと、減反で荒らしてある田んぼに「セイタカアワダチソウ」の黄色い花が満開になっている中を歩き回っていた。ある日、急に目がショボショボ、鼻がムズムズして、くしゃみが止まらなくなった。たまらず耳鼻科に駆け込んで、「花粉症」の病名をいただいたのである。

花粉症といえば、一般には春先の杉の花粉による発症が中心のようであるが、私の場合は春は何ともなく、秋の稲刈りの頃や「セイタカ」の花の時期だけの限定的なものであった。

一年中、どんな香りもくしゃみの元になる

ところが、だんだん年を経るうちに、秋の限定だった私の花粉症は、春にも出てくるようになり、最近では季節に関係なくいつでもどこでも、所構わず出るといった困った事態になっている。例えば、葬式に参列していて焼香台に向かった時、あのお香の煙が鼻を直撃して、くしゃみを堪える苦しさといったらない。また、車を運転していて、運悪くディーゼルトラックの排気ガスを食らったとき、しばらくは車内でくしゃみの連続で危険な事態になる。

さらに、デパートや商店に行った時に、うっかり油断して化粧品売り場の前を通過してしまった後などは、悲惨である。同様に、エレベーターできつい化粧をしたご婦人が乗り合わせた時なども、途中で逃げることも出来ずあきらめるしかない。

それでも、以上のような場合は自分が注意すれば、例えば焼香の間は息をしないとかすれば、何とかやり過ごすことも出来る。しかし、先日のように香り高い「キンモクセイ」の花が一斉に地上をおおう事態に対しては、もう完全にお手上げであった。

商売柄、マスクで顔を隠すことはよろしくないのに、いまの防御策としては目薬と鼻薬を常備することぐらいで、近ごろは「鼻うがい」も励行している。もし、私が目をショボつかせたり鼻を曲げたりしている場面を見られたら、これは花粉症と闘っている最中なのだと、同情いただきたい。